
暗い

小林希生

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗い

【Nコード】

N4890D

【作者名】

小林希生

【あらすじ】

なまけモノだが口だけは達者だと思っている小山舞子、自堕落な生活に終止符を打つべく山田運送株式会社の経理の職を得る。これで実家暮らしでの肩身の狭い生活から脱却できると安心したのだが・

- ・ 山田運送にはとんでもない秘密があった。

1 面接（1）

どうやら問題は解決したようだ。一時はどうなることだろうかと心配で仕様がながったが解決したのなら良かった。

ペットボトルを手に舞子はドアを開けた。

ドアを開けると色黒の男達が3人、田舎の商工会議所にあるような安物の長机に座っていた。エアコンはあまり効いていないらしく、少し、というか舞子にとってはすごく寒かった。

男達は書類に目を通してしている。きっとあれは履歴書だろう。でも何故3部あるのだろうか、そうか、きっとコピーしたんだろう。

男の1人が舞子に質問した。

「あんまり面白くない仕事だけいいかな」

「ハイ、大丈夫です。とゆうか面白くない仕事とは考えていません、仕事なんて、仕事なんていったらアレですけど。最初から面白い仕事なんてないと思うんですよ、御社のホームページを見させていだきました。仕事の内容ですか、経理。私経験が無いので良くわからないのですが、裏方ですか、裏方で支える、縁の下の力もちつていうか、そういう仕事をしたいなあ」と

本当はそんな仕事にはまったく興味が無かった。でもここで正直に「仕事したいだけ」などといつても何の得にもならない。

学生時代、講義もまともに出席せずバイトとサークル活動に明け暮れた舞子は、周りが就職活動で騒々しくなっても特に何もせず、遊び友達が徐々に少なくなつてとうとう1人だけになつても就職活

動をしなかった。留年ぎりぎりの成績で短大を卒業する頃にはもはや時すでに遅し、新卒求人は無くなっていた。

舞子は新卒で就職することが社会人生活にとって有利なことを知っていたので、中途入社する気は無かった。かといって具体的に何か行動したかという又何もしていなかった。

卒業後逃げるように地元に戻ってきた舞子は実家からすぐ近くのコンビニで週四日のアルバイトを始めた、そのコンビニのオーナーは舞子が小さい時からの顔なじみであり、就職しあぐねた舞子を歓迎してくれた。もともとこの田舎町で酒屋をやっていたのだが、一昨年コンビニオーナーに転向した。オーナーの娘は舞子と同じ年で、小学校、中学校と同じクラスで育った。彼女は今関東の国立大学三年生だ。

そういうわけで舞子はここ一年フリーターとして日銭を得て暮らしていた。といっても実家暮らしで別に貧しいわけではなく。だからと過ごしていた。舞子自身は記者や コンサルタント、広告業界など、おおそ大半の、自分をそれなりだと認めたくない学生があこがれる職業に就きたいと考えていた。が、現実就職となると求人数が極端に少ないばかりか、休みがないとか、将来性が無いとか、どんな職業にも当てはまるような抽象的で漠然とした不安で舞子はそういった求人に応募するのをためらってばかりいたので現実は何も変わらなかった。

半年が過ぎたあたりから、舞子に対して両親が冷たくなった。ちゃんとした仕事、正社員になってない舞子に苛立ちを覚えていたのだろう。場の悪さに耐えられなくなった舞子が応募したのが、山田運送株式会社の経理職員であった。結局彼女は、表舞台に上げられる職業に挑戦する勇気も無かったのだ。

「小山さんのような方だったらこの職種にぴったりだと思いますね。」

ところで小山さん、短大を卒業されたのが去年ですね、何か他の仕事なんかされていたのですか」

「どうしても自分が希望する職種が無くて、色々な説明会にも参加してお話を聞いては見たのですが、やはり就職となると今後の人生にも大きくかわってくるものですし。妥協はしたくなかったので就職は見送りました。この一年間は、サービスや流通の事を少し勉強してみようと、アルバイトですがコンビニで働かせていただきました。あと地元に貢献したいと考えていましたので、今回御社が求人を出されているということで早速応募させていただいたんです」

明らかに言いすぎだった、山田運送はそんなご大層な会社ではない。建物も薄汚いらくだ色で窓枠から黒いシミが壁に伝っている。社内も薄暗く、活気も無いが、選考を受けるのだから仕方の無いことである。

1 面接(1)(後書き)

感想・意見など大歓迎です。よろしくお願いします。

2 面接（2）

今回の選考、舞子は新卒採用として参加しているわけではない。

バイト先のオーナーが「いい話がある」といつて持ちかけてきた話である、詳細な募集要項があるわけではなく、オーナーを間に挟んで山田運送と連絡を数回取り合った結果、本来は学歴不問で年齢不問だが、舞子が商学系の短大卒であるからということで報酬に多少色をつけてくれることになった。舞子も最初は乗り気では無かったが自分が多少なりともエリート扱いされていることに悪い気はしなかったのも、オーナーの顔を立てるつもりで面接に参加することにした。

面接を受けるまでは結果はどうでもよいと考えていた、だから舞子は面接には私服で行った、そもそも舞子は就職活動をまともにしたことが無かったのでリクルートスーツを持っていなかった。それに、これは会社に来てみてわかったことであるが山田運送はリクルートスーツで行くことのほうが不自然に思えるような会社である。

「ところで小山さん、そのお茶はおいしいですか」

舞子は言葉の意味がわからなかった。舞子の座っている椅子には机は無いのももちろんお茶など出されていない。対面している3人の男達の前には湯のみに入ったお茶がある。みなそれぞれデザインが違うので個人の所有だろうか、先ほどから一番口を開く真ん中の男の湯のみはかわいいのかかわくないのか判断しかねる猫のデザインの入ったものだ。これで女子社員の気を引こうとしているのではないかと考えたが、そうだとしてもこれは無い。逆効果だ、きっと真ん中の男は女子社員に良くは思われていないだろうと勝手に想像した。

「あの・・・お茶って何でしょう」

「小山さんが持つてるのですよ、最近テレビでよくCMやっていますよね」

「あつすみません」

男は舞子が手に持つているお茶について言っているのだ。

「ああ、そういう意味じゃなくて、まあこんな会社ですから。いやあ、こんなこと言っではいけないですねえ。そんな肩肘張らずにいいですよ」

「申し訳ありません」

「で、そのお茶おいしいですか」

舞子はこのお茶が有名かどうか知らなかった。CMでやっていると言っていたがあまりテレビを見ないので男のいうCMを思い出すことができなかった。話が売れているかいないかの話になったが、舞子はコンビ二で働いているので一番売れているお茶が何であるか大体の見当は付く。紛れもなくこれは、売れていない。売れていないから、舞子は店のバックヤードから一本拝借してきたのだ。

「実際コンビ二での売れ行きは芳しくないと思いますが、おいしいですよ。これ最近出たものでメーカーも力を入れているんでしょうか、売れるとしたこれからかもしれないですね」

「そうなんだあ、テレビでやっている割には店では見かけないから、もう売切れちゃったのかと思ってました」

「そうですね、わからないものですね」

お茶の話はこれつきり出てこなかった。この後、短大生活について、両親について、通勤手当の支払い基準など、ありきたりなやり取りを行った。

「じゃあ小山さん、いつから出てくれますか」

「えっ、そうですね・・もし採用していただいたらの話ですけど来週の月曜日くらいからなら出られると思います」

「そうですか、ウチとしても小山さんにね、是非とも来ていただきたいのでお願いします」

中央に座っている男はあまり表情を変えずに言った。

「ありがとうございます」

山田運送での面接はこれで終わった。帰り、舞子は車の中で男達の名前を聞いていないことに気付く。

普通は面接の前に名詞をいただけたりするなどと思っていたが、山田運送のような中小企業にはそのような文化はないのかもしれない、だから、中小企業なのかも知れない。

舞子は推測した。そもそも舞子にあまり期待していなかったのではないか、だから男達は名乗ることをしなかった。でも舞子は合格したらしい。来週の月曜日から入社するらしい。だから男達の名乗らないという行動が余計不可解に思えてしょうがない。こうも考えられる、男達が自分の会社に誇りを持っていないのではないか。なんか恥ずかしいというか、そんな気持ちがあつたのではないか。面倒くさくなってきたので舞子はそこで考えることを辞めた。

出社するまでの間。

舞子はまず、オーナーに報告した。オーナーは大げさに喜んで。

「よかったな、まあがんばれよ！」

などと嘯いているが、この人は自分の事をどんな風に思っているのだろうと考える。オーナーの娘は舞子も知っている、昔から頭が良くて優等生だった。今は国立大の学生である。舞子は彼女が何をしているか知らなかったが過去の舞子のイメージと国立大に通っているという事実とで医学部とか、法学部などの学部で、きっと将来は一流企業に就職するのではないかと勝手に思い込んでいる。

三日間でコンビニの残務処理を済ませ、残りは特に何もせず、だらだらと過ごした。もうフリーターではなく会社員なのだからと、両親に対する後ろめたい気持ちも消えていた。誰かと遊びにいくとも考えたが、平日なので誰も相手してはくれない。

だらだらと過ごしていたせいで、舞子は来週から働くことすら忘れかけていた。山田運送のことが意識に上ることは面接以来ほとんど無い。ようやく会社のことが頭に浮かんだのは前日だった。

面接の時と同じような洋服を着て、舞子は山田運送に出社した。

2 面接(2)(後書き)

投稿済みの作品でも一部変更することがあります。
感想・意見大歓迎です。

3 面接（3）

山田運送に着く。

正面玄関に入る、右手に事務所が見えるが誰も出てくる気配がない、皆意識的に舞子の方を見ないようにしている感じがする。

その場に立っていることがなんだか気まずいので舞子は事務所に入って自分から声をかけようと思う。

天井まで届くパーテーションで区切られた事務所スペースの壁はタバコの煙で黄ばんでいた。ドアを開く。事務所の広さは30畳くらいだろうか、舞子が入ってきて数人が顔を上げた。その中で一番入り口に近いところに座っていたおばさんが声を上げた。

「はい」

「おはようございます。本日から働かせていただく小山ですが・・・」

「あつ　ちよつとまつてね」

おばさんはPCのディスプレイに張られている付箋を見た。

「えっと・・・こやままいこさんね」

「あつそうです」

「ちよつとまつててね」

おばさんはすぐ後ろにいる目つきが鋭い女に声をかけた。

「ねつさつちゃん　森山専務どこにいるか知ってる」

「あ、今日あさこえの日なのでたぶん今日のあさこえ作ってるんじゃないですか」

「あそう、ありがとう」

さつちゃんと呼ばれた女は表情をまったく変えずに応えた、舞子はさつちゃんという名前を覚えようとしたが次あったときに覚えている自信は無かった。

「小山さんすこし待っててくれる」

「はい」

おばさんは立ち上がると事務所の扉を開け、小走りに消えていった。

おばさんがいなくなり、舞子はおばさんの机の前に立っていた。他の人達は仕事をしている。何もすることがないので舞子は困った。話しかけるわけにもいかないし、壁にもたれかかる気にもならない。誰も舞子に一瞥もくれないが、それが余計に舞子の居心地の悪さを増強させていた。しばらくするとおばさんが戻ってきた。自分の机の前に突っ立っている舞子に話しかけた。

「もうすぐ専務来るからね」

「あ、はい」

おばさんはらくだ色の細身のパンツに白のカットソーという格好で腕には黒いコテをはめている、典型的な事務職の格好だ、あまりにもイメージ通りだ。

「まあその机に座って、今日その人休みだから」

「あつはい」

おばさんの隣の机に舞子は座った。机には透明のシートが敷いてあり、中に書類などを挟めるようになっていて、見るとどこかの名刺やら写真やらが無造作にはさまれている、ディスプレイの横にはペン立て、ティッシュ、卓上カレンダーと何かペットボトル飲料のおまけだろうか、小さなキャラクター人形が置いてある。卓上カレンダーで今日の日付を確認する。赤ペンで「A」と書いてある、なんだろうかと思っただ。

「いやおはよう、小山さん」

舞子が顔を上げると専務が立っていた。面接の時に一番話しかけてきた男だ。そうか、この人は専務だったんだ。

「あ おはようございます、よろしく願いいたします」

「はい、よろしくね、ちょっと小山さんこつち着てくれる？」

「はい」

専務は入り口のドアを空けて舞子に先に出るよう促した。席を立ち小走りにドアに向かう。専務の後を追うドアの左側、玄関とは反

対の方角の通路に専務は進んだ。蛍光灯は一部しか点いてなく、薄暗い。壁には「安全管理週間」やら「なくそうヒヤリハット」やらのポスターが張られている。ポスターはどれも古臭く、一昔前の感じがする。

突き当たったところに階段があり、階段は2階3階と地下につながっている。専務は階段を下り、地下に降りていく。地下は一切照明が点いてなく、真っ暗だった。舞子は不安になりながらも専務の二三歩後ろをついて行く。階段を下り切つてすぐに専務はドアを開けた。ドアから光が漏れて地下の廊下を照らす。天井にはパイプが走っている。廊下を挟んだドアの真向かいに火災報知機がある。電気は消えている。入るなり専務は口を開く。

「おはよう、今日から入った小山さん」

室内8畳くらいだろうか窓が無く、天井で薄汚れた蛍光灯が光っている。数が多いので暗くはないが、蛍光灯が汚れているので部屋には薄汚れた黄色い光が充満している。中にはPCが数台並び数人が方を寄せ合うようにして何か作業をしている。そのうちの一人の男が専務に向かって話しかけた。

「なんだ人をつたのかい」

男は最初一瞬舞子の方を見て、すぐに目をそらし。専務に話しかけた。

「とつたよ、見込みあるぞ」

「ほんとかい、またやめられたらこまるよ」

「いや優秀だつて ねえ小山さん」

「あつはい よろしくお願いします」

専務が突然フレンドリーに話しかけてきたので舞子は戸惑った。挨拶をするときにも専務の顔以外見ることができなかった。舞子の挨拶に何か返事をする者は誰もいなかった。

「まあちゃんと教えてくださいね」

男が専務に言った。専務はあいまいな相槌を打って部屋の億に進む、一番奥にドアがある。専務は舞子にに中に入るように言い自分

も中に入った。

中には金属製の棚が並んでいて、ダンボールやよくわからない部品が乱雑に並んでいる。箱には「純正部品」などと書いてある。そういえば山田運送は運送屋だ。面接に行った時に聞いていたのに忘れていた。きっとこれは保守部品が何かだろう。机が3つあり、ひとつは書類やダンボールが山のように積んである。隣の机には男が座ってなにやら部品を掃除？している。

専務は棚と棚の間に入って行き、どこからか椅子を持ってきて自分は最後の机に座ると、舞子にも座るように言った。

「ここは何の部屋なんですか」

「ああここね、ここ整備室なんだよ、車庫とつながってんの」

部屋が薄暗いのでよくわからないが、棚が並んでいる部屋の奥はどうやらシャッターのようだ、隙間から僅かに光が漏れている。僅かにオイルの臭いもする。

「あのね、きょうあさごえの日っていう日でみんな駐車場に集まって社長の話聞いたりする日なんだよ。社長今日いないけどね。そこで小山さんのこと、紹介するから。あと後で話するけど、今日は私についてね、会社の中やお客さんの所行ったりするから」

「専務さんはいつもここにいますか」

「ああ、私整備の責任者だから」

「へえ」

専務は胸ポケットからタバコを取り出すと火をつけた。専務を挟んで向こう側の男はこちらを気にすることなく金属のブラシでなにやらやっている。舞子はこの建物の構造がよく理解できていなかった。地下なのにどうして車庫と直結しているのか。あと専務は何故専務なのにこんな薄汚いところにいるのか。ここで働いている人たちはなんだか皆無愛想だった気がする。社員同士がいがみ合っている感じはしない、適当に仕事をしているような感じがする。ものすごく生活感のある会社といえはいいのだろうか。舞子は人の家にお邪魔しているような気がして緊張が解けない。初めてだから仕方の

無いことかもしれないが、挨拶くらいはするべきではないのか。言い方は悪いが舞子は彼らを程度の低い人間だと思っている。所詮中小企業なんだなんて、舞子は考えている。専務は腕時計を見ながらあと10分くらいで外に行くと言った。煙草の煙が行き場を失って専務の周りを漂っている。舞子はまだ初日だから文句言っても仕方がないと気を取り直して言った。

「私も煙草吸っていいですか」

4 回り(1)

「あっどうぞ」

専務は特に表情を変えることなくそう答えた。

舞子はポケットからヴァージニアスリムを取り出し、使い込んでいるヴィヴィアンウエストウッドのライターで火をつけた。女は基本的にタバコを吸わないと考えている男が多く、舞子はタバコを吸うたびに何か遠慮しなければならぬような居心地の悪さを感じていた。専務も舞子がタバコを吸う断りをとった時、ダメだとは言わなかったものの、こうして指を立てて煙を吐き出す舞子を少し見て驚いたような表情を見せた。

緊張していたせいか、舞子はいつもよりタバコを吸うストロークが深くなった、一気に吸うので口腔にはいがらっぽい煙が入ってくる。タバコの柄に印字された文字が燃えてなくなりそうになったとき、専務が言った。

「そろそろあさごえだから、行こう」

「分かりました」

専務がもう一つの扉を開けるとそこは確かに車庫だった、中途半端な半地下になっていて。緑色の軽自動車が一台止まっている。専務はそのまま半地下の車庫の坂道を登り、駐車場に出た。

駐車場にはもう既に20人程の人が集まっていた。どこからかビールケースが駐車場の真ん中に置かれている。専務が現れると20人は一斉にビール瓶の前に整列した。表情は暗い。

専務はビールケースの上に立つと、さっきの「さっちゃん」が突然叫んだ。

「今日のあさごえ!」

すると残りの19人もほとんど乱れのないタイミングで

「今日のあさごえ！安全第一！」

と一斉に叫びだした。

「今日のあさごえ！安全第一、今日のあさごえ！仕事は宝！」
「今日のあさごえ！安全第一。社会貢献いらっしやいませ！」

「ありがとうございました。もうしわけございません！」
「もうしわけございません！またご利用ください！」

「誠意！誠意！誠意で今日もがんばるぞ！」
「おおおっ！」

舞子はその様子をただあっけにとられて眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4890d/>

暗い

2010年10月12日08時53分発行